

SHIN CLUB 64

(株)辰 東京都渋谷区渋谷1-24-4 シブヤ百瀬ビル7F tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450 URL:http://www.esna.co.jp



今月のトーク/monthly talk

S邸 全景 撮影:齋部功

あいまい文化

ノンフィクションライター柳田邦男氏は近著『壊れる日本人』の中で、日本人が持っている「あいまい文化」について語っています。インターネット・携帯電話依存症に警鐘を鳴らし、今のアメリカの自由主義の押し付けに対抗するため、標準化や画一化とは逆の分散化・拡散化の文化こそ、これからの日本のあり方を考える上で重要だと言います。「各地方の人々がそれぞれの価値観と文化の中で暮らすのを尊重し合い、特定の価値観やスタイルを強制しない」のであれば「非合理であり非効率であるという点で一見劣ることになる」ように見えるけれども、「人間や自然を大事にすることになる」と述べています。そしてそれが、氏の提唱する「あいまい文化」を助長する動きにほかならないとしています。

—「あいまい文化」は西洋合理主義のように、物事を徹底的に分析して根源を明らかにすることに執着することよりも、そこにある全体をあるがままに見たり受け入れたりすることを大事にする。「あいまい文化」は必ずしも「効率」を重視しない。「効率」のために人間に犠牲を強いるようなことはしない。「あいまい文化」は人間理解にあたっては、偶然に体験する「瞬間の真実」といも言うべきものを大事にする。/人生における様々な経験や出会いには、因果関係では説明できない偶然のことが多いが、それらは人が生きるうえで大きな支えになったり深い意味を持ったりすることが少なくないのだ。—(『壊れる日本人』本文から)

柳田氏のいう「あいまい文化」は多くの人が共感するところではないでしょうか。昔の日本人社会が持っていた「自分を肯定し、他者をも肯定する」生き方に戻ろうということは、失敗したこの何年かをリセットしたいという気分には他なりません。バブルがはじけて以来、日本社会をなんとなく包み込んでいるような閉塞感、危機感がそれだけ大きいということです。

白黒ははっきり決着をつけなくてはならない手法についてゆけず、あるいは飽き飽きして、もっと手間や時間がかかっても人間優先の方法があるじゃないか—そんなふうになる人々が増えてきたように思えます。白と黒ではない、中間のグレイこそ、日本人らしさがある。「利休ねずみ」という言葉に表わされるように、微妙な色合いを楽しむことのできる感性をもっと誇りに思ってい、と言う人もいます。

建築の側から言えば、例えば縁側から庭の四季を感じ、ふすまや障子を開け閉めし、木の持つ風合いを楽しむ、かつての多くの日本家屋がそうであったような自然と一体となった内部空間が、「あいまい」空間というものです。家の中に土間があり、そこで煮炊きを行い、馬や牛などの家畜を育て、近所の人がちょっと訪れて玄関先で家人と話をしたり、モノを交換したりする空間。そのような空間で人々はコミュニティを育て、自然を感じ、生活をしてきたのです。田舎の農家とまではいかなくとも、普通の都心の住宅にも縁側があって、夏の暑さは庇や簾などで調節していたり、井戸も共同で利用するなど、人々は仕切られていない空間に慣れ親しんでいました。

しかし和風建築ならではの住まい方が出来なくても、「あいまいな空間」は実現できます。建築は「プランありき」です。設計によって、内部と外部が「あいまいな空間」は作れます。「この部屋は〇〇の、××するための部屋」というように明確に定義されなくとも、その空間を使って、住んでいる人が好きなときに好きなように使いこなすことは可能です。

そしてそんな暮らし方が出来る人こそ、「あいまい文化」に身をゆだね、自分流を貫く知恵と意志の持ち主だといえるでしょう。ときには、そんな魅力的な「あいまい空間」の方から、家族関係を修復し、新たな人間関係を呼び寄せ、さらに文化と呼べるものを生み出していくことができるのではないのでしょうか。

S邸 新築工事

「結び」の領域で1つにつながる重層2軒長屋

敷地は世田谷・松原の閑静な住宅街にあります。しかし前面道路が甲州街道からの抜け道になっていて、交通量が非常に多く、しかも交差点になっていて、ぎりぎりに左折する自動車の接触・衝突の脅威にさらされています。従って構造はRCでいわゆる「壁床ラーメン」とし、交通量の多い東側道路側に壁面を集中させ、南北方向が開放されるようにしました。積み重ねられた2つの住戸は完全に独立しているのですが、1階住戸の吹抜が2、3階メゾネット住戸の2階部分に割り込んでいて、将来この部分に階段をつくれば、2つの住戸が一体化するようになっています。

この建築の特色のひとつは内部のような外部のような曖昧な「中間領域」にあります。一つは1階の吹抜部分の「土間」で、オレンジ色の大きな引戸を開けると道路に直接つながるようになっています。両側に居室のある「通り庭」のような、バイクだって収容できる空間です。もう一つは北側2、3階部分にある「立体縁側」と呼んでいる空間です。ここはサッシを二重にし外側にホルバーの皮膜を設けて、温度や視線をコントロールしています。その「中間領域」の中に階段とバスルームがセットされています。(木下道郎)



①外観夜景。木製ルーバーから、2階の「立体縁側」の光が漏れる②1階北棟から南側を臨む。外部とも内部とも付かない「土間」は吹き抜けのため明るい。左側オレンジ色の扉を開けると道路。閉まっているときは、「土間」も内部空間である。③3階リビングダイニング。バルコニーからの眺めもよい。④2階「立体縁側」。階段の左側がバスルームになっている。⑤1階東面ファサード。オレンジ色の扉が開いて、中の「土間」が通り庭のように見える。⑥1階「土間」。隣接する2つの南北の個室は引き戸で区切られている。

撮影：齋部功

所在地：世田谷区
構造：RC造 地上3階
用途：専用住宅
設計：木下道郎/ワークショップ

VISVIM コンバージョン プロジェクト

住宅の雰囲気を残したコンセプトショップ

スニーカーブランド「VISVIM(ビズビム)」の初めてのオンリーショップ。神宮前小学校の裏、表参道から1本入った通りに面し、商業地域から住居地域へのグラデーションをなす位置にある。そうした状況を踏まえて、外観に住宅的なニュアンスを残しつつ喧騒から隔てられた穏やかな店内を確保している。たくさんの商品を並べるブティック的な賑やかさを避けて、少数の商品をゆっくり見てもらえる空間を心がけた。(日笠直彦)



①リフォーム前の外観。②リフォーム後の全景。外部も全面的に改修している。道路側に壁に囲われた内庭を設け、日光が差し込む明るい空間としている。③2階吹き抜けから1階を臨む。2階は商品の陳列と同時に手仕事の工房として使用することも想定している。④1階床から壁に連続して現場研ぎのテラゾー仕上げとしている。最近なかなか使われない仕上げだが、今回敢えて大面積で挑戦した。正面壁は漆喰塗り。天井はセメント系吹き付け。いずれも白色だが、素材によって異なる表情を見せる。⑤VISVIMの商品 FBT2。

所在地：渋谷区神宮前4-21
構造：S造 地上3階
用途：店舗・事務所
改修設計：日笠建築設計事務所



木下道郎(きのした みちお) profile

1951年 兵庫県神戸市生まれ
 1975年 横浜国立大学建築学科卒
 1978年 同大学院修士課程を経て共同でワークショップ設立
 1981年 株式会社ワークショップ代表取締役(共同)
 1995年 有限会社木下道郎ワークショップ設立

受賞(ワークショップとして)

1986 SDレビュー入賞:「ハートランド」
 1987 第2回UD賞:「ハートランド」
 1993 吉岡賞:「保谷本町のクリニック」
 1994 第10回東京建築士会住宅賞:「立川の家」
 1994 ディスプレイ産業奨励賞:「横浜市場」

今月は、S邸の設計者木下道郎先生にご登場いただきます。弊社では2001年「BALCON」、2003年「二軒家アパートメント」などを施工させていただいています。

—先日三鷹のご自宅が完成したそうですね。

木下: (模型を見せながら) 個人棟と家族棟を分けて真ん中にデッキがあって、部屋から部屋への移動はこの外部空間を通ることになって、雨が降るととても不便だけど、それを忘れてしまうくらい快適な空間です。ついお酒を飲みたくなってしまいます。

—ご家族の皆さんもご満足でしょう。

木下: うーん、でも僕のクライアントでこれほど文句を言ったのは、うちの奥さんくらいだよ(笑)。最初なかなかわかってもらえなかった。出来上がったものを見て、やっと満足してくれたんだな。

—例えば、それぞれの自分の部屋からトイレやバスに行くときは、一旦外部に出なきゃならないという不便ですか？

木下: それは理解してくれたけど、空間のトーンとかそういうところ。僕自身はあまりトーンとか雰囲気は重要ではなく、空間構成というところに興味があるわけで、たまたま木を使ったけど、それが真っ白い空間でも打ち放してもよかった。住宅なら住む人に色づけしてもらえればいいんですよ。

—今「色づけ」とおっしゃったのですが、まさにそうですね。暮らすことをイメージするとき、私も色とかテイストというものが大事だったりして、なかなか構成まではわからないことがあります。

木下: そうそう、部屋の中に置くものがよければいい、ということもある。建築家の方がごてごてに補足しちゃっている場合もあって、そういう建物もあっていいとは思いますが、僕はシンプルに作って住む人がいろんな色をつけてくれればいいと考えていますね。

—建主さんが建築家の先生に何をもって依頼するのは大変だと思うんですよ。お話が成立するまでの信頼関係が重要ですね。

木下: 僕の場合、今回のS邸もそうなんだけど、デザイナーというか、自分のテイストを持っているクライアントが多いんですよ。僕のニュートラルな部分を理解してくれて「建築、頼むよ」という感じで話ができますね。だから、三鷹の自宅と比べるとS邸はかなり違ったデザインでしょう。僕がどこが一番興味があるかという、2階の北側の階段部分。土間立体縁側というイメージ。こういう緩衝帯が入っていて、お風呂があったり、階段があったり、植物があったり、いろんな可能性が考えられる。もう一つが1階のオレンジ色の入口の中の土間空間。外と直接つながっていて、通り庭みたいになっている。扉を開けると外の空間、閉めると中の空間。そういう曖昧なところが一番気持ちが入りますね。

—木下さんのご出身は関西ですが、町屋に見られるような、そういう文化とどうか感覚を継承されているのでは、と考えるのは短絡的ですかね。

木下: 寒いところで育った人は曖昧な空間なんか作ってはいられない、しっかり閉じて寒さから身を守ろうということになるかもしれませんね。そういう意味じゃ、僕は、若い頃から車はジムニーで、屋根もすっかりオープンに開放して乗っていたし、レストランなんかでも外で食べるのが好きだしね。さすがに最近はオープンカーではないけどね。

—今回この北側の部分を「闊(しきい)」と呼んでいらっしゃいますが、どういう意味でしょうか。

木下: 山本理顕さんなんかも使っている言葉ですが、「結び」の領域のことなんです。Aという領域とBという領域の両方に属していて、両側にある装置を閉じたり開いたりしながら、AにもなるしBにもなるし、AでもBでもなくなる。どこかあいまいな「こうもり」空間ですね。建築家が登場するより前に日本人が暮らしの中で培ってきた文化であり、縁側とか濡れ縁とか、そういう空間をうまく使いながら、我々は豊かな文化を創ってきたわけなんです。

それなのに、都市が過密になり、また西洋から導入された集合住宅の形式に染まってしまって、そういう部分が欠落してしまった。西洋では空間の大きさが違うから、部屋はたくさん作って、ちゃんと区切るんですね。朝食を食べる部屋と夕食を食べる部屋まで分かれている場合もある。日本はややぶ台という装置を置いたら飯を食うところで、布団を敷いたら寝るところ。それが西洋に追いつくために、そういうフレキシビリティはまずいということになったんだね。結局2LDK、3LDKという住宅に画一化されて、それでは満足できない人々が出てきてしまった。僕は、日本人が忘れてしまった曖昧な空間の上手な使い方を取り戻す手助けをできればいいなと思っているんですよ。

—「もっと頭を使って暮らしてみようよ」と言われている気がします。

木下: 人間モデルで考えるのなら、工業化社会で求められる「お父さんはサラリーマン、お母さんが専業主婦、子供は2人」という標準モデルに従って、皆同じものを得て同じような充足感をこれまで味わっていた。やっとそこから抜け出して人間の多様性を認められる時代が来たと思いますね。標準モデルには当てはまらない人々、例えば結婚しない人、男二人のカップル、そんな人々も収められる器を用意したい。そこから何か文化が生まれる気がします。皆同じというのは、もういやだね。

—「二軒家アパートメント」が竣工したときに、「住む人がどんな使い方をしてくれるのか楽しみだ」とおっしゃってましたね。

木下: そう、今僕の事務所も入っていますが、皆さんうまく使ってくださいますね。オーナーのTさんが自分のペントハウスに住民を集めてパーティを開いてくれていますね。インテリアデザイナーの藤原さんや、オーストラリアから東大に研修に来ている建築家、皆さん、気に入ってくれているみたいですよ。

—羨ましいですね。自分の世界を持っている方が住んでいる共同住宅。屋上のペントハウスでパーティ・・・、楽しいでしょうね。

木下: 最近2部屋入れ替えがあったんですが、応募者の数がすごくて面接をやったそうです。最近集合住宅が供給過剰気味で、「デザイナーズマンション」も一時ほど行列ができないとは聞いていましたので、そういう中で評価を頂いたのはうれしいことです。喜んでくれるクライアントがいたらそれが一番。次につなげてくれるご縁が生まれます。

だから一つ一つ失敗できない。それには常に新しい提案を自分で考えていかなくてはならない。受けたからまた同じ、というわけにはいかないからね。建築というのは、いろんな可能性をさらっと受け止めてくれるものが多いですよ。一人の人間だって未来永劫変わらないということはないじゃないですか。人生何が起こるか分からない。僕も第一志望を落ちて北山、谷内田と会って、ゼネコンとか大手設計事務所の選択肢をまったく考えず、ここまでできました。あまりにも的確な人生設計しちゃうより、深く未来を考えない方が思わぬ展開をするね。

—ほんとにそうですね。どうもありがとうございました。

「鍛えられたこの5年」

有限会社美装開発
代表取締役

森村 康弘氏

今月は家具製作の「美装開発」に細山田工務部部長とお邪魔しました。

森村:辰さんの仕事は、家具やキッチンにこだわっている設計者の方が多く、まとめて行くのが大変ですね。

—どういって感じでおこなわれているのでしょうか。

まず建築図面を受け取ったら、ざっと打ち合わせをして、やりたいことが伝わるようにこちらから改めて家具の図面を起こします。それから設計事務所さんと何回かやり取りを行い、工場に発注し、職人とまた打ち合わせを行ないます。作っていく中でもまたやり取りをします。製作が難しいものは、取り付けも大変。この4～5年で、いろいろと勉強させられました。うちもおかげさまでグレードアップしましたよ。

—事務所ですべての作品の写真を拝見すると、ずいぶんうちの仕事が多いですね。

森村:キッチンの造作が得意な家具屋、家具の造作が得意な家具屋、それぞれありますが、うちのように両方特注でやるところはそれほど無いんですよ。図面も描けるので重宝がられていると思いますね。そのあたりが辰さんとマッチしているんでしょう。仕事は面白い反面、怖いですよ。

—どういったところがですか。

森村:一番は納期です。発注が決まり、工場との打ち合わせにまず1週間、作り始めて1週間、その後の塗装などを経て梱包して1週間、最後に取付、調整を行なって1週間。そんな感じで1ヶ月は見てももらわないと。協力工場はいま、新潟がメインで山形と群馬にもあります。工場によって職人のランクがあります。やはり職人個人の能力は大きいですね。図面を理解する力とか小口処理のセンスとかありますから、製作難易度によって委託先を選定しています。

店舗は、特に時間に余裕がないですね。工事の最終過程になっている我々に残された時間は、どうしても押してくる場合が多い。そんなとき、とにかく現場に納めるために多少仕上げは荒くても落ち着きどころを心得ている職人がいると助かります。それに、どんなに難しくても施工単価は一定ですから、なるべく少ない現況スタッフで業務をこなしていかなければならない。大変ですよ。

だから我々の業界では、デザインが決まれば大量に納品できるマンションのような、手間のかからない仕事に走ってしまった業者さんもたくさんいるんですが、不景気になって、マンション需要も減って、ここ10年くらいで半分くらいつぶれましたね。生産コストの低い中国・韓国で生産をし、バラして持ってきてこちらで組み立てを行なうという仕事の仕方をして



写真左:打ち出しコンクリート天板にシンクを埋め込んだキッチン。



写真右:コの字型のキッチン。きれいな赤色の扉が部屋を明るくしている。

ていた人もいますが、ひとたび問題が起きると時間がかかり、リスクは大きいですね。そのあたりが日本の工場が、不況といわれていても生き残ってきた理由の一つですね。



森村:でも商売としては割りに合わないですよ。家具やキッチン

美装開発 森村康弘 代表取締役

ンは、部屋のもっとも表に出て気になる部分でしょう。少しのミスが大事になる。例えば吊戸棚と下の物入れの扉の木目を合わせて製作して取め、上の方で傷がついたり、気に入らない部分が出たとします。すると全部の面を取替えなくてはならなくなる。そうなったらもう、儲けはなくなりますからね。

細山田:でもいい仕事をしていると感じますよ。

森村:先日、木造の住宅の家具をやったのですが、大方の町の工務店さんは図面を描けないんですね。設計の先生が我々の図面を見て、「久しぶりに家具の図面を見た」と感慨深げに語っていましたよ。

僕が建築出身なので、下地にベニヤ何ミリを何枚はるとか、そのノリだとか、納まりがどうなっているかを図面で確認するとか、そういう対応ができることで難しい仕事もいただけていると感じています。

—今後は、この事務所の隣の部屋にいる設計事務所と協同作業で、HPもアップして、より打ち合わせなど工期を短縮したフットワークのいい仕事の仕方を心がけていきたいと思っています。

—どうもありがとうございました。

TOPICS/INFORMATION

「安全衛生協力会 一斉パトロール」 7月1日

全国安全衛生週間にもなう集中パトロールです。下記の協力会社の方々にもご協力いただきながら、4班に分かれて、各現場の一斉安全点検を行ないました。

富士スチール(株)、(株)トミヨシ商会、(株)小松川、(株)大熊鉄筋、置鮎工業、(株)小関工務店、(有)中居工務店、日比谷総合設備(株) (順不同敬称略)。特に時節柄、熱中症への注意を呼びかけました。



「浄土宗延命寺庫裏増築工事 上棟式」 渋谷区 7月4日

元禄元年(1688年)創建の由緒あるお寺です。

構造:RC造
地上3階
用途:庫裏
設計:石川設計工房
完成予定:2005年9月末



「夏季一斉休暇のお知らせ」

今年の夏季一斉休暇は下記のとおりです。
8月12日(金)～8月16日(火)

「E&D NEWS発行」 7月10日

女性によるリフォームチームE&Dが発足して半年が経ちました。7月より季刊「E&D NEWS」を発行します。ShinClub郵送の方には同封させていただきます。ぜひご覧ください。

編集後記

・「建築家紹介」で登場いただいた木下道郎さんのかつての愛車スズキ「ジムニー」は、日本初の4輪駆動軽自動車として隠れたファンの多い車です。一言で車ファンと言っても、新しい自動車に操作性や機能性の進化を求める人がいる一方で、オークションなどで過去の名車と呼ばれる中古車を購入して、パーツなどを自分なりにカスタマイズする人も少なくありません。自分で使うものは手間と時間をかけて納得のいくものにする—そんな豊かさが中高年を中心に受けているようです。